

## I 釜ヶ崎レポート

### ■ 1.

日本でのアジアを考える

JR の環状線に乗って、新今宮を通ることがよくあった。電車の窓ガラスから「アイリン」地域の建物をぼう然と眺めることがよくあった。また、JR の新今宮駅から南海電車の駅まで歩いていくことも何回かあった。電車の中でも、通りを歩く時でも目に入ったのはごく普通の人々だった。その時々、自分が通りかかっているのは釜ヶ崎と呼ばれる地域であることを知らなかった。大阪の大学で知識を学ぼうと思って、日本にやって来た自分にとっては、釜ヶ崎の存在すら想像もできなかった。

清潔で美しく、きれいで秩序よくというのが、日本を実際に見たことがあるかないかを問わず、外国人の日本に対する一般的なイメージだと思う。反対に、日本以外のアジアに対して、汚い、秩序が悪いというのがいままで普通だったと思う。しかし、こういうイメージをもって、初めて「アイリン」を訪れる私にとってはその汚い環境や、ぼろぼろの看板、安いホテル、露店にそれほどびっくりすることではなかった。なぜなら、普段の生活のなかで安いアパートや公園でのホームレースたちを見るし、東京新宿駅の地下通路でホームレースの人々が住むダンボールハウスがズラリと並んでいる風景を見たことがあるからである。長く住んでいる内に、日本に対するイメージは以前と比べてだんだんと変わっていた。

だが、「アイリン」に行って実にびっくりしたことがある。その匂いである。その匂いが記憶として私の頭にあった。中学校二年頃に住んでいる家が立替えのため、一年間の臨時引っ越しがあった。引っ越し先の大屋さんは個人の建築会社を営んでいて、十数人の農村労働者を雇っていた。彼らが住んでいるところに一度入ったことがある。そしてなぜか分からないがその匂いが頭の中に鮮明に残っていた。今回アイリンに足を踏み込んだ時、その匂いが私の記憶を読みがえらした。その匂いが映しているのは確かに非日本的なものである。言い換えれば、先進諸国の一員で、豊かさを誇る日本にはあってはならないものと言える。そして、この非日本的なところから日本のアジア的な一面を私に考えさせた。

人々がアイリン地域を釜ヶ崎といおうが寄せ場といおうがここが一つの社会である。ここだけの文化があり、生活様式がある。住民の間には社会階層もある。しかし、この社会の最大の特徴は閉じた社会であるというところではないだろうか。ここの住民は仕事以外に普通の人々の生活の場に行かないし、そこ以外の人々とほとんど接触もしない、恐らく、彼らはその人だけが自分のグループの人間であり、その場所だけが自分の場所と感じているかもしれない。なぜここに来たのか、どんな人がここに流れ込むのかを聞かなくても、アイリンが持つ長い歴史から見れば、たぶんここの住民たちが住んでいる環境を根本的に変えることなど想像したことがないだろう。彼らが生活のために政府と戦い、人権のために世間と戦う。しかし、何世代の間も彼らは自分の社会地位を高めるために、世間の軽蔑をなくすために戦っていない。自分の社会地位、自分のグループの社会地位の上昇のために戦う精神が足りないところがアジア的だと思う。

(谷 陽)

## ■ 2.

日雇い労働者の密集するあいりん地域が大都市大阪の景観の一つともいえるだろう。生活基盤を失った人の存在は今日の世界においてどこでもなくすることができないが、こうした人々の密集地は各地域それぞれの固有の地理、経済的な背景をもって形成される。大阪市西成区に位置するあいりん地域は日本には有数の大規模な日雇い労働者の居住地である。

前にもどこかであいりんの話を聞いたことがある。自分が行って見ることはなかったが、怖いとか、汚いとかいったイメージが印象に残っている。今回はそういう先入観に影響されないようなつもりで巡検に出かけた。JR 環状線の新今宮駅からあいりん地域に近付くと、まずビジネスホテルという一泊 1,000 円から 2,000 円ほどのホテルの多さに注意がひかれた。当地域において 2~3 万人くらいの日雇い労働者が集中しており、かつ単身の男性が多いという。そのため、このようなホテルはこの人たちの住まいとしてたくさん作られた。想像よりかなり大きいホテルもある。あいりん地区労働福祉センターに向かい信号を横切ったら、日雇い労働者と言われる大勢の無表情の人々が集まっていることを初めて目にした。通常ホームレスといわれる野宿生活者は大阪には珍しいことではなく、にぎやかで繁華な商店街の人込みのなかやビジネス街の高層ビルの間にもよく見かけるわけで、驚くほどのことではないが、ここに来て私が多さに驚いた。当センターは日雇い労働者の労働生活をサポートするために、仕事を斡旋する機構として作られた。ここは人々の一日の居場所であり、一つの交流の場でもある。大きい建て物の中では、たくさんのごみが散乱するなか、人の群れが動いている。そこから、汗のにおいまたはごみのにおいとまぜたスラムというイメージを喚起させられる匂いが印象深いところだった。

うらの町を歩いてみると、他の所と同じような建て物が密集している。日本でどこでも見られる自動販売機はここでも多く設置されている。値段も全国均一の 120 円と付けられている(やはり普通の町かな? と思いはじめた)。建て物という建て物はほとんどホテルであり、高層とも言えるものも少なくない。屋根の下は多くのいわゆる路上生活者に占領されている。

さらに奥には商店街もあった。60, 70 年代には商店街は全日本において地域経済の繁栄の象徴であった。当時の釜ヶ崎は日雇い労働者の数が今日ほど多くなかったという。地域経済開発の一環であったこの商店街は今も路上生活者があふれている。空き缶の積んだ台車を押している人が往来して、新聞を販売する人が新聞や雑誌を並べて買う人を待つ。他の商店街と同様に、飲食店が多数あり、雑貨店の品物が通路にはみ出して並べられている。ゲームセンターがあり、パチンコ店もある。ゲームセンターに入ってみた、汗の匂いのほかにたばこの煙が濃いものであった。商店街のどこに行っても、道端で寝ている人の姿と汗の匂いが消えない。

俗称‘三角公園’という公園または西成警察署前でボランティアによって行われている‘炊き出し’が路上生活者の一つ大きなサポートである。あいりん地区の特有のイベントである。

この地域には一般住民もたくさん住んでいる。また釜ヶ崎に出て商売する人も普通に暮らしているようだ。しかし、日雇い労働者の集まりによるたくさんのビジネスホテル、職業斡旋機関の存在や、町にあふれる路上生活者、または炊き出しといった現象が加わり、町は変貌した。一言で言うと少し異様な町である。

(金 学軍)

## ■ 3.

- a : 朝が早い事
- b : 人と犬が多い事
- c : 露店の品目が多い事
- d : 生活関連の物価水準が低い事
- e : 物騒さ・殺伐とした空気が無い事

この5点が最大である。2000年11月14日、午前4~6時。以下補足……。

- a : 聞き込んだ時刻は四時半であったが、話によると、この時間の場所取りが肝要らしく、場所取りに急ぐ人、既に売り始める人…と、線路の走る高架沿いの道路は大変混雑していた。また、夏期は更に時間が早まるとの事である。屋には市をたたまねばならない決まりとはいえ、恐るべき早さである。
- b : このエリアの早朝の道路において、主役は人と犬で、それより一步引いた所に自転車と原付が続き、乗用車は正直言って肩身が狭い。道行く人々は割と速歩で車道を行き来しているのが印象的であった。
- c : これについては、正直言葉が出なかった。それこそ乗用車と住宅と生き物以外ならば、何でも揃うと考えても差し障りが無い程であった。出所も拾ったと思われる物、業者との繋がりを感じる物、お手製に見える物、とまさにバラバラであった。
- d : 衣食住に関する物価はだいたい7~8割で手に入りそうだった。特に素泊まりの宿に関して言うと、並の物で一泊千円なので、ホテル代ではなく家賃と考えても相当安いと言える。
- e : 夜明け前の寒空の下、ロクでもない世の中……。そんな負のイメージを持って臨んだ調査でしたが、実感はそうでもなかった。夜の寒さと暗さは仕方の無い事でしたが、人々のざわめき、足音、行き交う姿にはそれはそれで活気が感じられました。ある意味漁港の朝市や、下町の商店街と似通った点があると思い、そう考えると、日本にも無機質な都市だけではなく、生きている空間があると感じ、やはりアジアの一部だと感じました。

(竹下善博)

#### ■ 4.

現地に到着したのは午前4時半頃。夏も遠ざかり日の出もすっかり遅くなった秋本番、あたりはまだ闇に包まれていた。おそらく1日の中で一番物静かであろうこの時間帯に、釜ヶ崎の朝は既に始まっていた。南海電車の線路沿いの道路には既に多数の露店が店を広げ、街灯の明かりを頼りに品定めをしている客までいる。萩之茶屋のほうから新今宮方面へと北上するにつれ、だんだんと人の数も多くなっていく。新今宮駅が近づいてくる頃には、駅前のあいりんセンターへと向かう人の流れを確認できるまでになっていた。あいりんセンターまでたどりつくと、そこはもう人の海。まるでラッシュアワーの駅構内を彷徨させるほどの人ごみである。さすがにその中に突っ込む勇氣はなく、あいりんセンターの手前で一時退却することになる。そこで駅前にある萩之茶屋商店街の中を抜けたのだが、既にいくつかの店が営業を始めていた。このとき時刻は午前5時である。ほとんどが軽食店であり確かに需要はありそうだという気もしたが、それにしてもやはり早すぎではないだろうか…。

その軽食店のひとつに立ち寄り少し話を伺うことが出来た。まず最初に聞いたのは、やはり気になる「この辺りはいつもこんなに朝が早いのか」ということであった。やはりこれほどまでに街全体の朝が早いというのは不自然だ。イベントか何かがあるのでは、とか思ったりもしたが、そうではないらしい。だが、こんなに早くから露店を広げても客が来なければどうしようもないのでは、と思いそれについても聞いてみたところ、どうやらこの時間に露店を広げているところのほとんどは、場所取りが目的であるらしい。少しでも良い場所に店を広げる為に、こんなに朝早くから準備をしているのだ。

そしてもう一つ、この朝の早さに納得のいく理由を聞くことができた。この道路に立ち並ぶ露店は、昼前には全て店を閉じてしまうらしい。確かに露店を開くには警察署の許可とかが必要という話も聞いたことがある。そのへんの関係で、昼前に店を閉めないといけないということだそう。なるほど、確かに昼前までとなると普通に朝 10 時くらいから店を開いていたのではほとんど営業時間がない。その為に朝早くから店を開けて営業時間を長くしているのだ。そしてそれに合わせて、商店街の軽食店なども朝早くから店を開ける、ということだった。

「朝が早い」のが、いわゆる日雇いの人たちだけに言えるのではなく、それが釜ヶ崎の街全体の生活時間までをも変えているのだ。まるでこの一帯が日本の標準時から少しずれているのではないのかと思えるほどであった。

(山崎公義)

## ■ 5.

釜ヶ崎が、一日の中でもっとも活気づくのは、朝の四時から六時である。仕事を求める日雇い労働者と彼らを集める斡旋業者が大勢釜ヶ崎に集まるからだ。他にも朝の早い日雇い労働者を対象にした飲食業者やサービス業者が、集まっていた。日雇い労働者のおおくは疲れているように見えた。彼らは、低賃金労働者として長時間働かされているからだ。平均年齢もかなり高いようであった。釜ヶ崎は、不況の現在仕事も減り条件も一層厳しくなっている。経済成長の犠牲となった釜ヶ崎の労働者とアジアの労働者をどういつしすることはできない。建前としてそう感じた。正直なところ労働者の疲れた顔からアジア的なものを想像するのと思うとひどく幻滅した。アジアは、世間で言われているものと違って国として疲れているのかと思ったからだ。

釜ヶ崎には、労働者を対象にした住まいがたくさんある。それらは粗末なものであり住環境は、極めて悪いように思われる。釜ヶ崎には、多くのこうした日払い住居を営業する業者がある。見かけは大変大きいのに一室あたりの面積は二畳くらいである。このような日払い住居の密集が、釜ヶ崎をアジア的なものになっている。混雑の中の活気こそアジア的にかんじた。

物の値段は、日本で物価の安いといわれる大阪の中にあって更に安い。物の物価が、購買力で決まるなら、釜ヶ崎の購買力はかなり小さいと考えられる。一方低い物価が釜ヶ崎にアジア的な一面を覗かせている。飲食店は、うどん一杯 200 円が相場である。学食並である。日払い住居では、一日 1500 円で泊まることができる。釜ヶ崎は、日本よりもアジアに近い。しかしこうして安い物価の釜ヶ崎が成立するのは、所得の低い労働者が、大量にそこに密集しているからだ。

労働者の多くは、他の地域からの流入である。大阪出身はあまりいない。また、日雇い労働者は、親

しい斡旋業者から仕事をまわされることが多い。これは、ある種の相互扶助関係といえるのでないか。他の地域からの流入とある種の相互扶助は、大正区の沖縄人にも見られたことである。これは、都市化される町が、よく見せるしるしである。アジアがこの段階に達しているとする、釜ヶ崎もアジア的であると思われる。

(宮脇秀文)

## ■ 6.

あいらん地区に足を踏み出した瞬間、今まで私が思っていた日本人（前向きで一生懸命働く、真面目、勤勉な人など）の姿とはまったく違う人々の集団が目に入った。これだけ経済が発展している先進国にこのようなところが存在するとは想像すらできなかったことであつた。、「いったい、どうして?」、という疑問が先に頭に浮かんだ。無気力な人々の顔、不潔な道路、安いビジネスホテル、あちこちで目に入る露店商などはあいらん地区の代表的な印象であつた。何よりも頭に残ったのはすべての感情を失われてしまったかのような無表情な顔だつた。まるで人生の敗北者のように写つた。高度に発達された競争社会を生きている現代人がもし、まったく競争力を持てなかったらどうなるかを考えてみるといくつかの道があると思うが、こどもそのひとつではないかと思う思いがした。競争で勝つ方があつたら当然、負ける方もある。今回のあいらん地区の見学は負けた側が生きていく場が狭すぎると言う厳しい現状を物語っているようだつた。また、私の中にいくつかの謎を残し様々な考えをさせてくれた。

(金 尚奎)

## ■ 7.

我々日本人の肌は黄褐色をしており頭髪は黒く、その下に覗く瞳の色は陰りのある茶色を顕している。天地に宿る神々を社に奉り現世の業を説く仏像を寺に安置する。箸でものを食い茶で喉を潤す。日本人はアジアの一員である。が、一口にアジアといっても西はトルコから東は日本列島のへ先まで、その領土は広大であり同時に驚くほど多様性に富んでいる。聖と俗、高邁と愚劣、貧富、砂漠と熱帯。相反する互いの要素はここで渾然とした様を見せそれを見る者を畏怖させる。我々はアジアの一員である。だが果たしてこの国に、とりわけ都市の直中に、「アジア」はあるのだろうか？私はアジアの感触を求め大阪市南部に広がる釜ヶ崎「あいらん地区」、及び大阪市北東部守口・門真市の境界区域の探訪にでかけた。

あいらん地区にあつて私は様々な、異様な光景を目にしたよう思われる。そこにはひとりの一般人の進入を拒む日雇い労働者達のコミュニティと呼ぶべきものがあつたからだ。昼も夜もなく吹き曝しの労働福祉センター内に座り込む薄っぺらな背広を羽織る労働者の群れ。公園の脇に店を構える屋台、すべり台の横には居住者のテントの列が。千円いくらの値を掲げるホテルの看板。ランドリーも荷物預かり所もそこにはある。古びた商店街に足を踏み入れた私は型遅れのポスターを、ひっそりと営む喫茶店を、薄暗く煤けたようなアーケードを、見た。背を丸めた中年男が要領の得ない話を相方に延々とささやいている。店先に並べられた品物はどれも安価で、流行を知らない。私はそんななかを黙々として歩いているうち何軒かの遊郭に出くわした。これで、揃わぬものはないというわけだ。大通りに出た私は車の騒音に関わらず

そこがいやに静かなことに気がついた。

第二の探訪地は守口・門真市の境を侵食するかのよう広がる木造賃貸アパートの密集地区であった。この区域の地図はさながらジクソーパズルのようで、また敵を落とし込む一個の堅固な城郭のようでもある。私は迷路のなかへ、馬を駆る兵士としてこの怪物の巢へ突進した。先程の釜崎同様この区域の住人の大方が低所得者であることが立て掛けられたいくつかの看板から容易に推測できた。そしてここに居を構える多くの住人はまっとうな職をもちあるいは私と同じ学生であるかもしれない。ここはひとつの騒がしいアジアの小都市なのである。そう言い聞かせ私はただ感覚的にこの息苦しいほどに連なるアメーバの体内の探索を開始した。錆びた鉄の階段を階上に渡す木造のアパートを幾棟も通り過ぎ、路上に溢れかえる自転車をつま先で避け、両腕をおもいきり広げれば肺が圧迫されてしまいそうなほど狭い家々の間を縫って歩いた。四方を木造家屋に囲まれた月極め駐車場に小石を集めたのは近所の子供達であろうか？黄色く塗られたU字型のガードレールをランドセルを背負った少年が跳び箱みたくひと跨ぎした。牧歌的といえるかもしれない、だが私は大層気が重かった。訪れたのはよく晴れた日でまだ明るいうちであったが私はその爽快な空を見るのが嫌になっていたのである。空を仰いだけで黒い地面に叩きつけられそうな気分を駆られたのである。それを思い私はすぐさま踵をかえし、駅の方角へと急いだ。私は情けない少年のようであった。

以上が私の見た「アジア」であったが、ここで踏まえるべきことは私が求めていたものはアジアらしい景観でなく、アジアらしい感触であったということだ。ぬくもりとも置き換えてよい。上記した二地区には「困窮」という共通項がなかったであろうか？もしそのなかに私達がアジアを見たというのならそれは結構な皮肉ではないか？私はその皮肉のなかに決してアジアの欠片を見ることはない。それはどこにでもある贗作なのだから。

第一、私達はアジアをもう少しよく知るべきではないだろうか？

(花房修吾)